

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：13201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06820

研究課題名(和文) 幼児期の感情理解における「わからない」反応の発達：「表情」と「会話」に着目して

研究課題名(英文) The development of young children's "Don't Know" response in emotion understanding: Focusing on facial expression and conversation

研究代表者

近藤 龍彰 (KONDO, Tatsuaki)

富山大学・人間発達科学部・講師

研究者番号：50780970

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幼児期の子どもを対象に、「他者の感情はわからない」ことがわかる発達的变化を検討した。その際、(1)状況からの推測、(2)表情からの推測、(3)日常会話、に着目した。(1)について、5歳ごろより、ある状況では他者の感情は「わからない」という回答を行うこと、(2)について、表情を理解する際は「わからない」という回答が少なくなること、(3)について、子どもがやりとりを行う相手が時期と年齢によって違うので、誰との会話に着目するのかが重要であること、がそれぞれ明らかとなった。これらの知見は、「他者の感情がわからない」認識は推論の手がかりにより異なる発達プロセスを経ることを示唆している。

研究成果の概要(英文)：This study investigated preschooler's "Don't Know" response in understanding emotion of others, focusing on inferencing from the situation, inferencing from facial expression, and daily conversation. In relation to "situation", "Don't Know" response occurred from 5 years old. In relation to "facial expression", "Don't Know" response rarely occurred. In relation to "conversation", the partner(s) whom children interacted were changed by seasons and developmental stage. These findings suggests that the developmental process of recognition "I don't know about emotion of other(s)" varies among the cues for inferencing the emotion.

研究分野：発達心理学

キーワード：感情理解 幼児期 「わからない」反応

## 1. 研究開始当初の背景

### 1-1) 先行研究の状況

「子どもは自分や他者の感情をいつ、どのように理解していくのか」を明らかにすることは、子どもと関わる実践現場においても、人間の起源を探る哲学的な分野においても、重要なテーマである。このテーマは、発達心理学及び教育心理学において、これまで(1)状況、(2)表情、(3)会話、の3つのアプローチから検討されており、3歳~6歳にかけて感情理解が急速に発達していくことが明らかとなっている。

ただし、これまでの研究では、いずれも子どもが他者の感情を「わかる」ことを基準にして感情の発達が検討されてきた。そこでは、感情理解において子どもが示す「わからない」という反応は「未熟」と捉えられ、「誤答」とされてきた。しかし、子どもが自己と他者の違いを区別していくほど、他者の感情については「わからない」ようになっていくのはある意味で当然である。にもかかわらず、自己と他者の感情を区別し、「わからない」という反応を踏まえて感情理解の発達を検討した研究は見当たらない。

### 1-2) これまでの研究

先述の問題意識から、私はこれまで上記3つのアプローチのうち、「状況」手がかり課題を用いて、幼児を対象に、自他感情を区別した上で、他者の感情は「わからない」という反応が見られるのかを検討してきた。その結果、5・6歳ごろより「他者の感情はわからない」という反応が見られ出すことを明らかにしてきた。

## 2. 研究の目的

本研究では、上記の研究状況を踏まえて、これまで扱ってこなかった「表情」および「会話」の側面を加えて、感情理解における「わからない」反応の発達の变化を検討した。具体的には、

【研究1】表情認知課題における「わからない」反応の年齢ごとの生起頻度を明らかにする

【研究2】日常場面での会話における「わからない」反応の年齢ごとの生起頻度とその前後の文脈を明らかにする

の2点を明らかにするよう試みた。

## 3. 研究の方法

### 3-1) 研究1の方法

研究1では、3-4歳児51名、5-6歳児61名を対象に、以下の実験課題を行った。なお、各年齢群は、実験者と一定期間関わりを持つ顔見知り群(3-4歳児21名、5-6歳児32名)と、そのような関わりを持たない初対面群(3-4歳児30名、5-6歳児29名)に分けた。

表情産出課題：うれしい・怒っている・悲しい・びっくり・変な顔、の5種類の表情を子どもに作ってもらい、それを写真に撮る

他者表情認知課題：成人男女のうれしい・怒っている・悲しい・びっくり・変な顔、の5種類の表情の言語ラベリング、および特定を行う。

自己表情認知課題：先ほど自分が作った5つの表情の写真について、言語ラベリングを行う。

この研究では、(1)他者と自己の表情の理解、(2)表情産出課題における表情の巧緻性、の2つの側面から研究成果を出した。

### 3-2) 研究2の方法

研究2では保育園の3歳児クラス20名、4歳児クラス20名、5歳児クラス20名を対象に、5月期、6月期、7月期の3回、自由遊び場面での子どものやりとりを観察した。子ども1人につき約10分間(合計30分間)の観察データを収集した。なお、研究の最終目的は「会話」の分析であるが、その内容は関係性(誰との会話であるのか)によって変わってくると思われた。そこで研究2では、そもそも幼児期の子どもは誰と関わりを持つのかという基礎データの把握を行った。

## 4. 研究成果

### 4-1) 研究1の成果

研究1では、以下の点が明らかとなった。

(1)自己と他者の表情の理解においては、「変な顔」といった内的感情を表現しない表情でさえ、「わからない」反応はほとんど生起しないことが示された(Table1, Table2参照)。また、全体的な傾向性として年少より年長のほうが「わからない」反応が少なかった。「これまでの研究」では、5・6歳ごろより他者感情が「わからない」反応が生起することが示されていることから、「表情」といった目に見える手がかりから感情を推測するプロセスと「状況」といった目に見えない手がかりから感情を推測するプロセスではその発達過程に違いがあることが示唆された。

この知見は、日本発達心理学会第29回大会で発表された。

Table1 他者表情理解における「わからない」反応数(人)

	うれしい	怒っている	悲しい	びっくり	変な顔	合計
年少 (n = 38)	2	2	3	1	4	12
年中 (n = 38)	3	1	2	2	3	11
年長 (n = 35)	2	1	0	0	0	3

Table2 自己表情理解における「わからない」反応数（人）

	うれしい	怒っている	悲しい	びっくり	変な顔	合計
年少 (n = 38)	1	1	4	4	2	12
年中 (n = 38)	1	1	3	3	3	11
年長 (n = 35)	1	1	2	0	1	5

(2) 内的感情を表現しない「変な顔」表現について、発達的变化が見られた。具体的には、(a) 5-6 歳児は 3-4 歳児よりも「変な顔」がより表現できること、(b) 男児は女児よりも「変な顔」がより表現できること、(c) 初対面の 3-4 歳児群は他の群よりも「変な顔」が表現されないこと、が示された。このことは 5-6 歳ごろより、内的感情を表現しない表情を意識的に表現する力が向上すること、表情を表現する相手との関係性が表情表現に影響すること、を示唆している。

この知見は、The British Psychology Society Developmental Section Annual Conference 2017 および日本発達心理学会第 29 回大会で発表された。

#### 4-2) 研究 2 の成果

研究 2 では、以下の点が明らかとなった。

(1) 5 月期よりも 7 月期の方がより他児・他者と関わる頻度が多くなる

(2) 年少児は先生と関わるが多く、年長になるにつれ徐々に子ども同士で遊ぶようになる

(3) 年齢を経るごとに、異性の友達の中で関わらない子どもが増えてくる

これらの結果は、会話を分析する際に、誰との関わりでの会話データを収集し、分析するのに注意する必要性を示唆した。

この知見の一部は日本発達心理学会第 26 回大会で発表し、心理科学に掲載された。

#### 4-3) その他

「状況」手がかり課題を用いた研究で、本研究課題に関連する知見として、以下の 2 点を明らかにした。

##### 感情推測における他者認識の発達

幼児が他者感情を推測する際、他者についての情報量によって他者と認識することに違いがあるのかを検討した。その結果、4・5 歳段階から具体的な他者（友達）の感情を認識し、5・6 歳段階から一般的な他者（架空の他者）の感情を認識し出すことが示唆された。この知見は心理科学に掲載された。

##### 他者感情の不確実性認識の 2 水準

幼児の他者感情推測における「わからない」反応を言語的な説明の有無と反応時間の 2 点に着目して発達的变化を検討した。その結果、明示的（言語的な説明）・暗黙的（反

応時間の変化）の両方の水準で他者の不確実性を認識するのは 6 歳ごろからであることが示唆された。

この知見は日本発達心理学会第 28 回大会で発表し、心理科学に掲載された。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

(1) 近藤龍彰. (2016). 幼児期における具体的な他者と一般的な他者の情動推測の発達の関連性：他者認識に焦点を当てて. 心理科学, 37. pp.22-37. (査読あり)

(2) 近藤龍彰. (2017). 幼児期の他者感情推測における暗黙水準の「わからない」反応：不十分な理由づけおよび反応時間に焦点を当てて. 心理科学, 38, pp.1-13. (査読あり)

(3) 近藤龍彰. (2017). 幼児期における友達関係の発達的变化：やりとりの頻度と相手に着目して. 心理科学, 38, 25-37. (査読あり)

〔学会発表〕(計 4 件)

(1) 近藤龍彰. (2017). 幼児期の他者感情推測における暗黙的な「わからない」反応. 日本発達心理学会第 28 回大会（於：広島国際会議場, JMS アステールプラザ, 広島市文化交流会館）

(2) Kondo, T. (2017). The development of funny face production in preschool children. The British Psychology Society Developmental Section Annual Conference (at Crowne Plaza, Stratford-upon-Avon, UK).

(3) 近藤龍彰. (2018). 幼児期の自己-他者表情理解における「わからない」反応. 日本発達心理学会第 29 回大会（於：東北大学）

(4) 近藤龍彰. (2018). 幼児期における笑わせ行動：子どもはどのように「変な顔」を表現するのか. 日本発達心理学会第 29 回大会（於：東北大学）

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

近藤龍彰 (KONDO, Tatsuaki)  
富山大学人間発達科学部・講師  
研究者番号：50780970

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
なし

(4)研究協力者  
なし